

日本語教師をやめるに至ったのはなぜか

—M-GTAによる分析—

清水順子・小林浩明

(清水：国際教育交流センター非常勤講師)

(小林：国際教育交流センター)

キーワード

日本語教師、修士、やめる、M-GTA、

要旨

日本語教師の養成や教育に携わる中で、日本語教師をやめていく人を見ることは少なくない。本研究では、一人の元日本語教師の事例に注目し、なぜやめるに至ったのか、そしてやめたことをどのように捉えているのかを理解することを目的とした。インタビューを行い、M-GTAの分析方法を用いて構造化を行った結果、やめるに至るには、単にやめたいと思ったからではなく、その時の状況で仕事への復帰が先延ばしになった結果だとわかった。また、外側から見ると完全にやめてしまったようにみえた人が、実はいずれは仕事復帰したいと希望していることもうかがえた。

1. はじめに

結婚や出産を境に仕事をやめる女性は少なくない。日本語教師という職業は女性が大半を占めるが、他の職業と状況は変わらないだろう。

私¹は大学の学部時代に国語教員の教職課程と日本語教師養成課程を履修したが、日本語教師になることを選択したとき、大学院へ進学することにした。大学の課程だけでは専門知識が十分ではないと感じた上に、そのままの自分で教える自信がなかったからだ。そして、大学院在学途中から日本語教師としての仕事を始めた。大学院修士課程を修了した数年後に結婚を決意したが、それを機に日本語教師をやめようとは思わなかった。妊娠していることがわかった時にも、出産の前後半年ぐらいは仕事を休もうと思ったが、やめようとは思わなかった。そし

て現在、生まれたばかりの子どもを傍らにこの論文を書いている。

日本語教師の求人サイトには、常に講師募集の案内が出ている。また、実際日本語教育の現場にいと、ほとんど半年ごとに新しい教師が入ってくる。クラスの増設に伴う新規採用の場合もあれば、辞職した教師分の補充である場合もある。そして、新しく入ってくる教師の大半は初任期の教師であり、1年も経たないうちにやめてしまう人も少なくない。つまり、出入りが激しいのである。

従来、日本語教師についての研究は、教師を養成するという観点から行われており、教師をやめるという観点からの研究は行われていない。しかし、日本語学校のような日本語教育機関では、日本語教師をやめる人が後を絶たない。学校における最重要リソースとも言える教師が長く続かないということは、教師が育たないということである。

したがって、本研究では、日本語教師をやめた人がなぜ日本語教師をやめるに至ったのか、そしてやめたことをどのように捉えているのかをやめた人の視点から理解することを目的とする。つまり、「内的視点」(西條, 2007) から研究することが必要であると考え、私と同じように大学院修士課程を修了しており、結婚と出産を経て、現在子育てをしている元日本語教師のJ子さんを理解することから始めることにする。なお、本研究で言う理解とは、構造化することとする。

2. 研究方法

2.1 研究協力者

関心相関的サンプリング(西條, 2007)により、研究目的にあう研究力者を選定した。本研究の協力者であるJ子さんは、大学院入学前からX日本語学校の非常勤講師をし、大学院修了と同時にやめている。現在は子育てに専念しており、復職する予定はない。

J子さんは、大学在学中に民間の日本語教師養成講座に通い始める一方、事務職として就職した。働きながら養成講座を修了し、その後はボランティア教室に行き始めた。そして、事務職の仕事は2年でやめ、大学院進学のための準備のためにT大学で科目履修生となり、半年後にX日本語学校の非常勤講師となった人である。そのJ子さんが大学院修了の3月に、2年半教えたX日本語学校の非常勤講師をやめてしまった。私はJ子さんと同じように大学院へ行き、その後結婚をして出産をしたが、日本語教師をやめようとは思ったことはない。しかし、なぜJ子さんは日本語教師をやめたのか。それを知りたいと思った。

2.2 調査方法

J子さんには事前に研究内容を説明し、承諾を得た上で2008年11月21日と同年12月12日の

2回J子さん宅のリビングでインタビューを行った。あらかじめ聞きたいことを設定しながらも、自由度の高い半構造化法インタビューで行った。なお、インタビュー内容はICレコーダーに録音した。また、インタビュー中に気がついたことなどはインタビュー終了後にメモをした。

2.3 分析方法

インタビューは桜井（2002）を参考に文字化を行った。文字化データはA4で32ページになった。本研究では、Jさんが日本語教師をやめたことを構造化することを目的としているため、分析方法は木下（2003;2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いることにした。M-GTAはヒューマン・サービス領域の研究に適しており、多くの先行研究が行われている（木下，2005）。そして、M-GTAはデータの解釈から説明力のある概念の生成を行い、そうした概念の関連性を高め、まとまりのある理論（構造）を作る方法である（木下，2003；木下，2007）。しかしながら、M-GTAでは具体例の少ない概念は採用しないという面があり、必ずしも本研究のように一事例に基づく研究には適していない面もある。そこで、本研究ではSCQRM（西條，2007；西條，2008）により、研究目的に照らし合わせて重要だと考えられるものは概念として採用していくことにした²。

2.4 分析の手順

まず、研究目的に従ってデータを繰り返し読み、インタビューの中で繰り返し現れるJさんの発言箇所にもーカーで印をつけていった。次に、着目した箇所を含む範囲を抜き出し、1つの具体例として、分析ワークシートの具体例の欄に貼付けを行った。その後具体例をうまく一言で言い表せるような概念名を考えた。概念名が決定したら、同じような具体例を他の箇所からも探し出して、最初の具体例の下に記入していった。一つの概念に一つの分析ワークシートを作成し、新たな概念が生成されないと判断できるまで同じ作業を繰り返し行った。図1は分析ワークシートの例である。分析ワークシートが一通り出来上がると、次に概念間の関係を考え、概念同士を比較対照しながら、カテゴリーに分類していった。上記の手順で進めていく中で、分析ワークシートの概念名や定義の変更の必要があると判断した場合には、適宜修正を行った。複数の概念のまとまりであるカテゴリーが生成されたら、それらが明らかにするプロセスを考えていくことにした。

次に分析結果について共同研究者とピアカンファレンス（磯村，2004）を行った。ピアカンファレンスでは、私がまず分析結果を説明し、共同研究者がそれについてフィードバックを与える方式を取り、最終的な判断は私が行った。

〔図1 分析ワークシート例〕

| | |
|-------|--|
| 概念 | 仕事と私生活の時間を区別したい |
| 定義 | 仕事は、授業をしている時間とそのための準備の時間も含まれる。自宅での自分のための時間とは区別したいと思っている。 |
| 具体例 | <p>(インタビュー②P12～13)</p> <p>A：後ね、最後ぐらいのどこやけどp14のところ。家事と育児って大変っていう感じで、これに仕事をするってなるとって。日本語教師の仕事が増えるって。仕事をやるってどんな感覚？</p> <p>B：それは、<u>家のこともして、仕事をするってこと自体が。</u></p> <p>(途中略)</p> <p>B：でもさ、あたしはそれがない。〇〇さんのはいい感じに仕事じゃないんやけど、あたしもしかしたら、いつ終わればいいのか分からんっていうの、準備が？自分の生活時間に全部例文考えるっていいよったやんね。<u>楽しい時間っていうよりも、私生活の隅まで入りこんだっていう、ちょっと嫌な表現。だけ、区切りをどうつけばいいかが自分で分からんくて、嫌だ</u>って。</p> <p>A：区切りをつけたい？</p> <p>B：うん、あたしはやっぱり<u>仕事は仕事</u>やったかも。自分の時間でこれ（準備）をするっていうより、<u>自分の時間はやっぱり本読んだり、映画見たり、とか、趣味したり</u>っていうのが自分の時間やけん……。</p> <p>A：あ、じゃそれ（仕事）と同列じゃないんやね。</p> <p>B：今ただ単に言葉について考えたり、普段の生活で言葉を辞書でひくのは自分の時間やけど、<u>仕事のためにこれを用意するっていうのは、仕事の時間。</u>だけけん、そこで区切りをこの時間しかないって区切りを前は出来んやっただけん、考えるのはずっと考えよったけん……。普通の仕事もして、<u>疲れて帰ってくるけど……。</u></p> <p>A：家帰っても仕事って？</p> <p>B：<u>そうそうそういう感じかな、やっぱり。</u></p> |
| 理論的メモ | |

(注) A：私 B：J子さん

3. 結果と考察

3.1 分析結果

分析結果について「図2 J子さんが日本語教師をやめるに至ったプロセス」に示した。

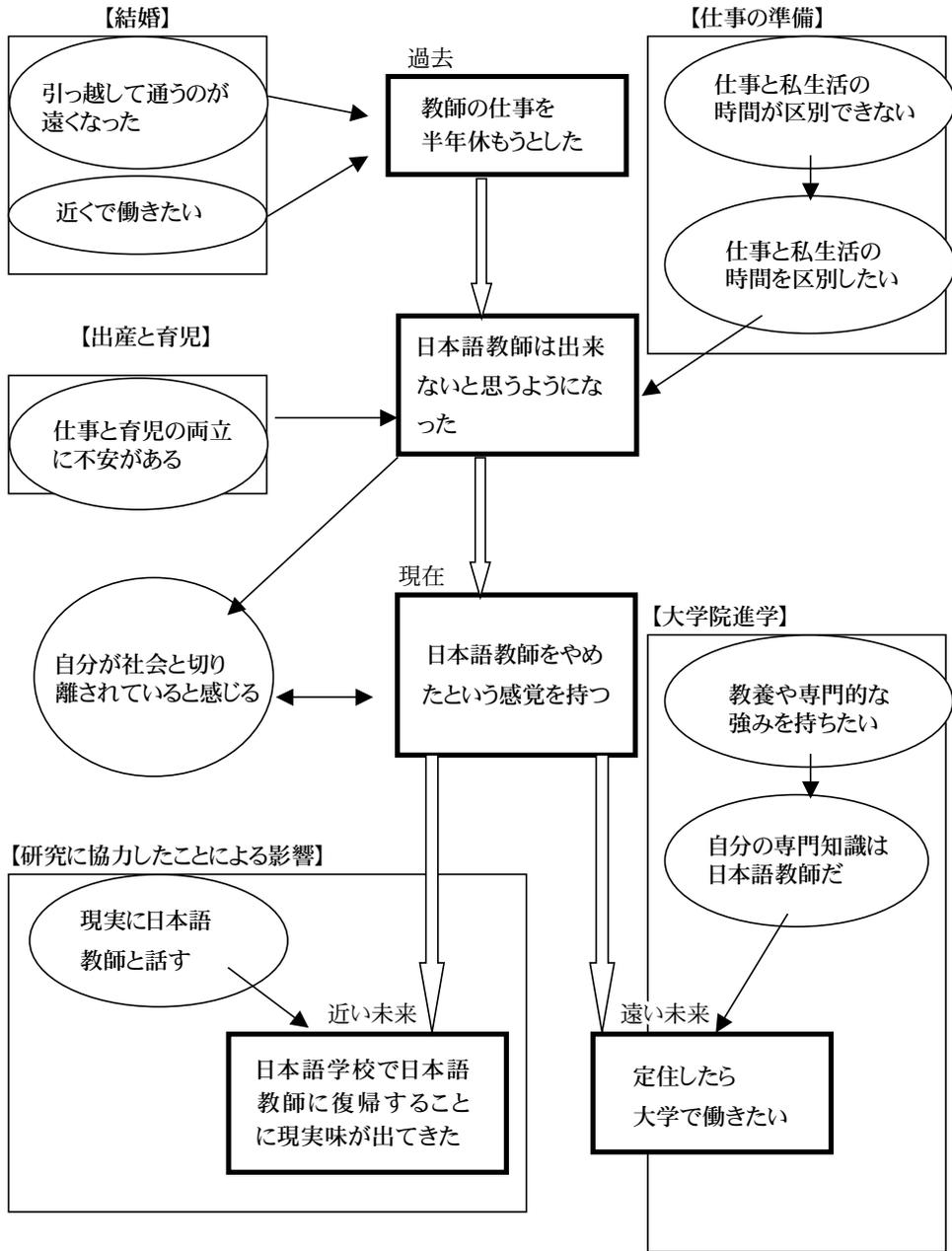
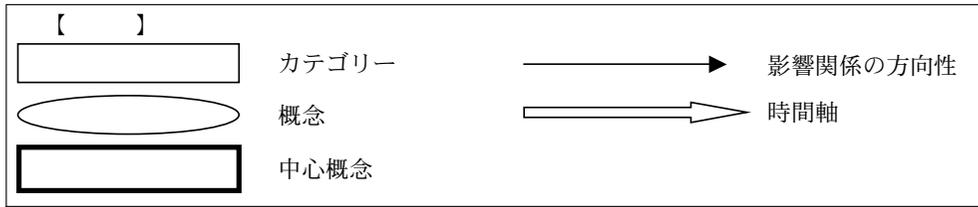


図2 J さんが日本語教師をやめるに至ったプロセス

日本語教師をやめるに至ったのはなぜか

(注) 図の読み方は以下の通りである



3.2 考察

ここでは「図2 J子さんが日本語教師をやめるに至ったプロセス」に沿って考察を進める。

J子さんは、【結婚】する前は家族と同居しており、結婚後新居に引っ越した。その為、独身時代は自宅から近かったX日本語学校までの通勤時間がそれまでの倍に長くなってしまった。J子さんは授業の準備をする際に、学生からどんな質問をされてもそれに答えられるように完璧に用意しておくようにしていた。独身時代は私生活の時間を自由に仕事のための授業準備に充てられたが、結婚して家事が加わるとそうはいかなくなってしまった。それに「引っ越して通うのが遠くなった」ことで、日本語学校で授業した後採点などの残業をして帰ると遅くなってしまい、夕食の支度が間に合わず外食したことが何度もあった。さらに、大学院の修士2年で修士論文を提出する時期だったので、J子さんの生活は、仕事・家庭・論文と多忙を極めていた。それでもしばらくは頑張ってX日本語学校に通い続けていたが、次第に体力的に持たない、疲れたと感じ、大学院修了を期にX日本語学校をやめることにした。どんなに疲れていても日本語教師を本気でやめたいと思ったことはなかったので、通勤距離の負担を減らすために「近くで働きたい」と考えていた。しかし、自宅近くの日本語学校の4月からの採用に間に合わず、10月の募集まで待つことになった。それで日本語「教師の仕事は半年休もうとした」。代わりに定時で帰ることができて、仕事の準備の必要がない派遣事務をしようと思い、登録をして採用を待っていた。

派遣事務の仕事の採用が決まると同時に妊娠が判明し、派遣の採用は断ることにした。出産予定日が12月だったため、10月からの日本語学校の応募も見送ることにした。【出産】後1年は【育児】に忙しく仕事復帰のことを考える余裕はなかった。こどもが1歳になれば預けて働けるかなと考えていたが、実際に1歳になってみると預けることが心配であり、育児に追われる日々の中で「仕事と育児の両立に不安がある」。日本語教師をしていた頃は、質問に答えられる教師を目指して、際限なく【仕事の準備】をしていた。「仕事と私生活の時間が区別できない」が、一日中日本語の授業のことや扱う例文を考えていても苦にはならなかった。しかし子育てをしていると、いくら準備をとことんまでやりたくてもそればかりをしている訳にはいかない。また、準備にたくさんの時間を費やしていた過去の自分を、堅い、もっと気楽にでき

たらよかったのにとマイナスに評価するようになった。そして「仕事と私生活の時間を区別したい」と考え、授業準備が必要な「日本語教師はできない」と思うようになった。

J子さんは現在も復職をしていない。3年日本語教師から離れており、育児休業中という感覚ではなく、一旦「日本語教師をやめたという感覚を持っている」。家事と子育て中心の生活で交際範囲が限定され、「自分が社会と切り離されていると感じる」。日本語教師をしているときは異文化と常に接することができ、それが仕事をする上での楽しさにつながっていたが、現在の生活では様々な出会いや外国人と触れ合う機会が少なく、「日本語教師をやめたという感覚」はますます強くなった。

その一方で、「自分の専門知識は日本語教師だ」という思いは常にあり、今は無理でも子どもが小学校ぐらいまで大きくなったらいつかは日本語教師したいという希望を抱いている。【大学院進学】も日本語教師を続ける上で「教養や専門的な強みを持ちたい」と思ったからであり、それがJ子さんの専門性への自信につながっている。現在はご主人の転勤が続いているが、遠い未来、引っ越しがなくなって一箇所に「定住したら大学で働きたい」と思っている。

最後に【研究に協力したことによる影響】について述べる。私がJ子さんに研究協力を依頼した時、J子さんはまだ具体的な仕事復帰への予定はなかった。子どもを保育園に預けて働くとは考えておらず、日本語教師をやめて3年が経ち、身近に日本語教師がいない生活で、日本語教育のことや日本語学校で再び働くなど考えられないといった様子だった。それが今回、私が研究内容についての説明をしたり、私とインタビューで過去のことについて互いに話し合ったりしたことで、J子さんは日本語教師をしていた頃のことや日本語教師になったきっかけを再び鮮明に思い出している。「現実に日本語教師と話す」ことで、近い未来、「日本語学校で日本語教師に復帰することに現実味が出てきた」という。また、大学院へ行き、結婚をして出産したという共通の経験を持つ私が、仕事復帰の予定を具体的に立てていることを話すと、J子さんは私にもできそうと思ったと話してくれた。家事や育児をしながらでも、何とかやりくりしてやれそう、やってみたいと思い、近隣の日本語学校の募集に応募してみようと考えているようだ。

4. おわりに

本研究では、日本語教師をやめた人がなぜ日本語教師をやめるに至ったのか、そしてやめたことをどのように捉えているのかをやめた人の視点から理解することを目的とした。分析方法としてM-GTAを用いてJ子さんが日本語教師をやめたことについて構造化を試みた。その結果、J子さんの「日本語教師をやめた」ことは、日本語教師の仕事をやめようと思ってやめ

日本語教師をやめるに至ったのはなぜか

たのではなく、その時その時の状況で仕事への復帰が先延ばしになった結果だとわかった。また、外側から見ると完全にやめてしまっているように見えるけれども、J子さんの中には遠い未来の予定ではあるが、いずれは仕事復帰したいと希望している。

このように、日本語教師をやめた人の中にはその人固有の複雑な経緯があり、やめた要因を単純に特定することは重要ではない。また、たとえそれがやめたように見えたとしても、そうではない人もいることがわかった。本研究で取り上げたJ子さんの事例もその一部分である。日本語教師の置かれた現状を見ると、このような研究が蓄積されることで、日本語教師の養成・教育に携わる者にとっては従来のやり方を見直すことにつながり、日本語教師を継続、あるいは復職を支援する具体的な方策への礎となることが期待される。

注

- 1 本稿における「私」は、清水順子を指す。
- 2 SCQRMでは、事例数や具体例がどれだけ必要であるのかは、研究者の関心、つまり研究目的と相関的に決まると考える（西條, 2007; 西條, 2008）。

参考文献

- 磯村陸子（2004）「ピアカンファレンスを活用する」無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ編『ワードマップ 質的心理学』新曜社
- 木下康仁編（2005）『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂
- 木下康人（2007）『ライブ講義M-GTA実践的質的研究法－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMベーシック編－研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで』新曜社
- 西條剛央（2008）『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMアドバンス編－研究発表から論文執筆、評価、新次元の研究法までの』新曜社

謝辞：本研究にご協力頂いたJ子さんに心より御礼申し上げます。